

ウェビナー開催海外インシュアテック2氏が講演

「今後APIをどう生かすか」テーマに

Insurance API Organization

アイリックコーポレーション、hokan、マーシージャパンの3社が共同で運営するInsurance API Organizationは6月2日、第3回会合の第2弾として、日本の保険業界が今後APIをどう活用していくべきかを考えるウェビナー「海外Insurtechから学ぶ！日本の保険API鎖国事情」を開催した。ウェビナーでは、特別ゲストとして海外からIgnatica社代表取締役CEOのマニエル・サンミゲル氏、Uncharted社マネージングディレクターのビップ・オコーナー氏を招聘（しよ）うへいし、両氏が「デジタル技術の活用によって、日本保険市場のブレイクスルーをどのように起こすか」について語る講演を行った。

第3回会合の第2弾としておきたいポイントとして挙げられている点」を挙げると語っていたとした。今回のウェビナーでは、サンミゲル氏が昨年12月の会合で話していた「これらポイントについてサンミゲル氏は、日本は保険加入の過程で保険会社の都合が優先されている点」と、「日本では保険APIに提供できるような、保険APIが「データ共有」という枠を超える必要が」と会合の成果に期待を寄せた。

顧客との対話にAPIの活用提言

次に、hokan代表取締役CEOの尾花政篤氏が登壇し、日本の保険業界の概況について説明

した。尾花氏は保険の販売状況について、生損保ともにオンラインでの販売は普及しておらず全体の1

割程度ではあるものの、Zoomなどを介した非対面での募集や商談活動の割合は増えていると述べた。

へとシフトチェンジしていると述べ、日本の保険業界がその流れに乗るためには、消費者の活動やライフスタイルがどのよ

うにリスクと関わっているかを理解する必要があると語った。

二人の議論を聞いたアイリックコーポレーションの小林天馬氏は、「日本の保険業界がより消費者を中心に据えた保険サービスへ移行していくという、とても興味深い話だった。ぜひ実現してほしい。そのためには、既存のインフラにAPIを接続する部分の課題がたくさんあると思う。このあたりの課題を日本の保険会社に聞いてみたい」と語った。



(左上から) ティルダム氏、サンミゲル氏、オコーナー氏、(左下から) 小林氏、尾花氏、出口氏

さらにシステム面については、保険会社の基幹システムは非常に重く、なかなか刷新に結びついていないとの現状を報告した上で、APIについても、銀行などの他の業界は法制度も含めて整備が進んでいる一方、保険業界はまだそれらの面での進展は小さいと付け加えた。

また、マーシージャパンアシスタントバイスプレジデントの出口カルナ氏は、API接続の難しさをコストのせいにするのは言い訳に過ぎないというサンミゲル氏の言葉に対し、「非常に印象に残った。実際にコストが本当にかかるのか、保険会社で働いている人の意見を聞いてみたい」と関心を示した。

「本日の会合を機に、本組織の目的の一つである『保険エコシステム形成』のための議論が、より活発になることを願う」と会合の成果に期待を寄せた。